

第39回 日本図書館協会建築賞

「選考経過」

2022年12月21日に締め切られた第39回日本図書館協会建築賞への応募館は、公共図書館が5館であった。

2023年1月11日に第1回建築賞審査選考委員会(以下、「選考委員会」とする)を開催し主査の選定の後、本賞の趣旨、審査方法などの確認を行った。その後、第一次審査に進み、申請書類に基づく審査の結果、5館全てを第二次審査の対象館とした。現地審査は2月から4月にかけて、5館それぞれを二人以上の選考委員が視察し、資料やデータの収集並びに図書館関係者および設計者への聞き取りを行った。

4月28日に開催した第2回選考委員会では、資料と写真などにより委員間での情報共有の後、慎重審議の結果、全会一致で下記の図書館を建築賞候補館に選定した。

・板橋区立中央図書館(東京都)

「選考総評」

新型コロナウイルス感染症拡大予防対策も4年目となり、館の対応も大分沈静化している様子ではあるが、ご多忙の折りにも関わらず現地審査に対応いただいた応募者各位および各館関係者に御礼申し上げたい。昨年と大きな違いはすべての館が新型コロナ禍の真ただ中に開館した公共図書館であることだ。つまり図書館は、消毒、検温、ソーシャルディスタンスや飛沫感染防止パネルなど万全の対策をした上で開館を迎え、ウィズコロナの時代の図書館の役割を見据え、それぞれの地域に応じた市民サービスを絶やさぬような工夫が見られた。

さて、最終選考委員会では、公共図書館建築としての評価、市民サービスや運営体制への評価に分けて慎重に検討をした。今回は多くが直営の公共図書館であったこともあり、来館者へのサービスのみならず、職員や司書の配置体制、学校図書や司書との連携の充実に対することが話題になった。建築においては外部空間との行き来やつながり、BDSの設置位置、複合施設の融合のあり方などを通して、設計者と運営者双方の意思疎通や理解度などが議論された。このように現地に足を運ばないと評価しづらい内容まで踏み込んで審議を行った。それらの結果、前述の館に対して建築賞を与えることとした。

受賞館の評価は別記とするが、惜しくも選外となった4館について以下に短評する。(訪問順)

「新宮市立図書館」

世界遺産に認定された独特の地域文化・景観を持つ新宮市の地域を俯瞰する位置に計画された施設。市民が集まる場であるホールと地域の歴史を保存する場である図書館の複合施設。中央に構造的な要素を配置し、四周に郷土の歴史を眺望しながらゆったりとした時間を過ごすことのできる最上階の図書館。テーマ配架とNDCが混在した9万冊の書籍の並べ方は市民に親しみやすい。この二重構造は建築の長寿命化や環境性能にも大いに寄与している。限定された立地条件とホールとの複合計画で上下のゾーン分けをせざるを得なかったようだが、日常使いとしての図書館のアプローチのわかりにくさや、熊野学やホールとの連携に課題が呈された。

「淡路市立津名図書館」

4.2万人の人口の淡路市に二つある図書館のうち

の一館の移転建替え。隣接する既存音楽ホールホワイエに対して中庭を挟んで交流エントランスを計画し、双方のオープンスペースを行き来する構想。BDSの設置がされていないので、両館が連動するイベントや展示などへどこからでも出入りしやすい。交流エントランスに面したワークスタジオやサポーターズルームはさまざまな利用が想起される。ただしコロナ禍とあって、まだ十分にその機能が発揮されていないようだ。市内他館の活動と相乗りして、今後ますます市民に親しまれて利用されることを期待する。

「行橋市図書館」

北九州市のベッドタウンとして人口が微増している行橋市の中心市街地活性化事業。にぎわいをもたらす起爆剤としての役割を目的として、手狭になっていた図書館を移転新築した計画。市街地に開いた1~2階と、川とその対岸に向き合う3~4階と建築の構造軸が大きくずらされている。そのずれで生じた軒下やテラスを上手く利用して市民のためのスペースを生み出しているが、バックヤードにその皺寄せを感じる。1階の市民ホールや交流スペースへも図書館利用者が自由に行き来できるようにBDSの設置位置が1階の主たる風除室に限定されているが、一方でそれが足枷となって川側のテラスへの出入りが閉ざされている。PFI事業で運営している複合施設の良さを存分に活かした今後の運営に期待する。

「寝屋川市立中央図書館」

2018年6月の大阪府北部地震で既存中央図書館が被害に遭い、急遽、寝屋川市駅前の市が所有するビルに移転した。中央図書館を大人向けとし、その後に向かいにある駅前図書館を子ども向けにリニューアルする計画。築40年近い商業ビルの改修は大きな制約があり、短期間での設計は大変なご苦労をされたと思う。大人向けに落ち着いた空間を演出しているが、滞在型の図書館としては少しでも自然光を取り入れる工夫ができなかったものと憂慮した。これらは、「こども図書館」も完備されてから総合的に評価したい。運営面では、コロナ禍に移転設計を始めたこともあり、電子図書館の積極的なアピール、市内郵便局への配送サービス、市立小中学校児童生徒への図書配送サービスなど、精力的に新たなサービスを考案実

行している。さらに、バックヤードには学校司書の活動拠点もあり、教育委員会直営ならではの学校との緊密な連携が現地で確認でき、評価が高かった。

このように通して振り返ると、昨今の図書館は地域に開かれた図書館、市民の居場所、複合機能の融合といったコンセプトで語られることが多い。それにもかかわらず、BDSゲートの設置によって、外部への開放や外部も含めた居場所の選択を阻害していることに気がつく。いくら設計者が工夫してもその意図がBDSゲートによって実現していないという実態がとてつもなく歯がゆい。スーパーマーケットやコンビニではセルフレジや無人店まで登場しているこの時代に、ICタグで自動貸出機が設置されればそれで十分ではないかと思う。ゲートのメンテナンス費や誤作動や万が一を監視するための近傍に配置する人件費なども勘案すればなおのこと、BDS設置から解放して有益なことはたくさん見えてくると思う。この辺りも設計者と運営者の想いを一つにしたいところだ。

なお、いずれの館も開館から3年未満と短期間であり、それもすべてコロナ禍での運営である。設計者の意図した空間を運営者や利用者が使いこなしているかというところまでは至らず、評価するには時期尚早であるという意見も複数の委員から出たことを添える。

(文責・八木佐千子:審査選考委員会主査)

*

〈建築賞審査選考委員会〉(五十音順)

- 浴 靖子(東大和市立中央図書館、日本図書館協会図書館施設委員会 委員)
折戸 晶子(明治大学図書館、日本図書館協会図書館施設委員会 委員)
川島 宏(栗原研究室、日本図書館協会図書館施設委員会 委員)
中井 孝幸(愛知工業大学、日本図書館協会図書館施設委員会 委員)
八木佐千子(有限会社ナスカー級建築士事務所、公益社団法人日本建築家協会 委員)